



健康づくり支援室だより



2018年冬号

「風疹」をご存知ですか？　今回は「風疹」についてお話ししたいと思います。

皆さんは「風疹」は子どものかかる病気だと思っていませんか？

実際は大人も子どももかかる感染症です。

「風疹」とは？

「風疹ウィルス」によっておこる急性の発疹性感染症です。

風疹ウィルスはせきや会話、くしゃみなどで飛び散る飛沫で感染します。

風疹の感染力はインフルエンザに比べて強く、インフルエンザの2～3倍とされています。

*患者1人が感染させる平均人数は、インフルエンザが1～3人に対して、風疹は5～7人です。



どんな症状？

感染から2～3週間（平均16～18日）の潜伏期間（症状の無い期間）を経て
発熱、発疹、リンパ節の腫れがあらわれます。

また、不顕性感染（感染しても症状が見られない状態）が15～30%程度いるようです。

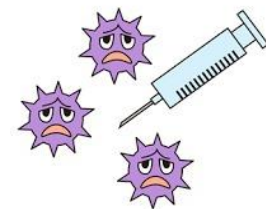
ウィルスの排泄期間は、発疹のでる1週間前から発疹のたあと1週間とされ、
熱が下がると排泄されるウィルス量は激減し急速に感染力は低下します。

大人の場合、高熱や発疹が長期化することがあり、関節炎（関節の炎症）を伴うこともあります。

大人は子どもより重症化することや、脳炎などの合併症により入院が必要になることもあります。

何が問題なの？

- 感染力が強いことです。
- 妊娠初期（20週ごろまで）の妊婦が感染すると、胎児に感染し、
心臓や眼、耳に障害を引き起こすことがあります（**先天性風疹症候群**）



対策は？もし、かかってしまったら？どうしたら予防できるの？

「風疹」に対する治療法は、症状を和らげる対処療法になります。

予防には風疹ワクチンの接種が最も有効です。



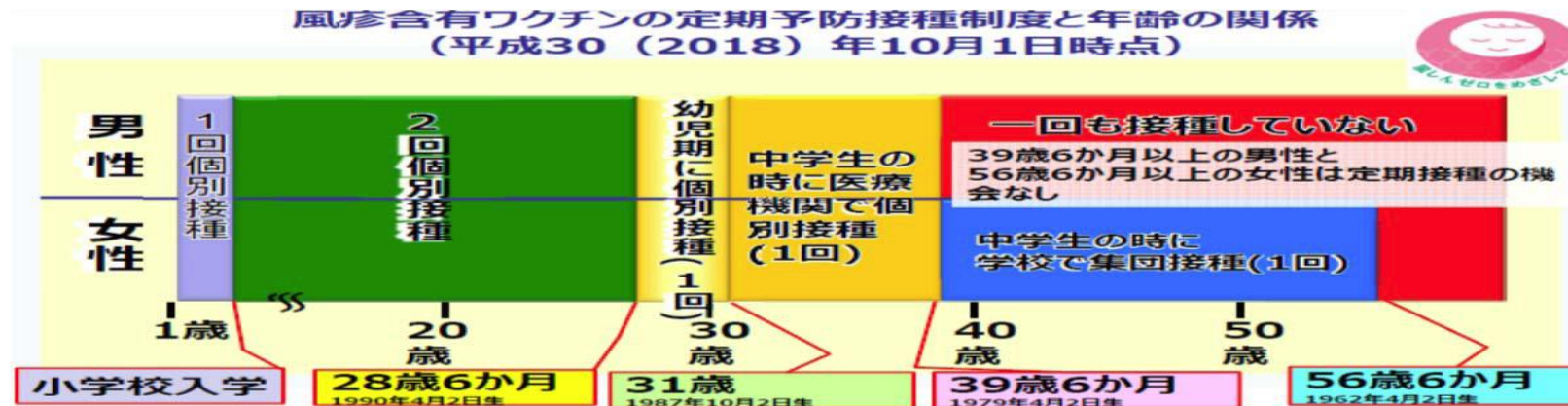
「風疹」はワクチンで予防可能な感染症です。

日本では、2006年度から麻疹風疹混合（MR）ワクチンが定期接種に導入され、時限措置などのワクチン政策により、風疹に対する免疫を持つ機会を得られ、風疹患者の中心は小児から成人へと変わってきました。

2012～2013年の大流行時、患者の中心は20代～40代の男性でした。

2018年10月31日現在も風疹患者報告の中心は、30代後半～50代前半の男性でした。

30代後半～50代前半男性の集団に感染率が高い、その理由は以下表が示す通り、1回も予防接種を受ける機会が無かった世代だからです。



「風疹流行に関する緊急情報: 2018年10月31日現在」p5. 国立感染症研究所 感染症疫学センター

「先天性風疹症候群」を予防するためにも、女性だけではなく男性も風疹の予防接種を受ける必要があります。女性は妊娠中に風疹ワクチンを接種することができないため、早めに抗体を獲得しておくことが必要です。

予防接種を受けることで社会全体で風疹に対する予防対策を実施することに繋がります。

ぜひ、風疹予防のために予防接種を受けましょう。

※風疹の抗体検査や予防接種費用助成制度についてはお住まいの市区町村窓口にご相談ください。

引用参考: 「風疹について」厚生労働省, 「風疹Q&A(2018年1月30日 改訂版)」国立感染症研究所, 「先天性風疹症候群とは」国立感染症研究所, 「職場における風疹対策」国立感染症研究所, 「職場における風疹対策ガイドライン(平成26年3月)」国立感染症研究所, 「神奈川県風しん撲滅作戦 特設ページ」神奈川県ホームページ, 「風疹流行に関する緊急情報: 2018年10月31日現在」国立感染症研究所